

## 27日 火曜

### 伝道者の書



9:11 私は再び、日の下を見た。競走は足の速い人のものではなく、戦いは勇士のものではない。パンは知恵のある人のものではなく、富は悟りのある人のものではなく、愛顧は知識のある人のものではない。すべての人が時と機会に出会うからだ。

9:12 しかも、人は自分の時を知らない。悪い網にかかった魚のように、罠にかかった鳥のように、人の子らも、わざわいの時が突然彼らを襲うと罠にかかる。

9:13 私はまた、知恵について、日の下でこのようなことを見た。それは私にとって大きなことであった。

9:14 わずかの人々が住む小さな町があった。そこに大王が攻めて来て包囲し、それに対して大きな土塁を築いた。

9:15 その町に、貧しい一人の知恵ある者がいて、自分の知恵を用いてその町を救った。しかし、だれもその貧しい人を記憶にとどめなかった。

9:16 私は言う。「知恵は力にまさる。しかし、貧しい者の知恵は蔑まれ、その人のことばは聞かれない」と。

9:17 知恵のある者の静かなことばは、愚かな者の間での支配者の叫びよりもよく聞かれる。

9:18 知恵は武器にまさり、一人の罪人は多くの良いことを打ち壊す。

競争も戦いも、必ずしも有利な者が勝つとは限りません。それは法則性もなく偶然であり、神などはいないようにも感じられます。また知恵に関しても、それがあんなら尊重されると期待したところで、結局は「貧しい」など理不尽な理由で忘れ去られてしまいます。それもまた神などいないような出来事

です。

しかし、「知恵は力にまさる。」ということも事実です。仮に「貧しい者の知恵」としてさげすまれても、「知恵は武器に」まさるということは、誰もが認めることでもあるのです。知恵はこのように神の創造を想起させる入り口でもあります。

かつて哲学者デカルトは、否定しようのない確かなものにたどり着くために、全てを否定してみるといふ知的探求をしました。それは全てが「むなしい」という伝道者の書にあるような知的作業でしたが、結局はそのように全てを否定しつつ考えている自分の存在自体は否定できないことを発見したのです。「我思う。ゆえに我有り。」という有名な命題に至ったのです。そしてこの自分を有るものとされた創造主が存在することを弁証しました。

この箇所にある知恵とはまさにそのようなものです。知恵さえもむなしいものに思えてしまう、そんな人生であっても、そのむなしさを感じている自分自身は存在し、その自分を存在させた方がおられるということです。伝道者（著者）は知恵ということを題材にしながら、未信者にそのような思いになることを期待しているのでしょう。

私たちも祈りが聞かれないことによるむなしさを感じる時、または神がおられるという現実感を失うときがあるかもしれません。そのようなときこそ、否定しようのない神の存在と、自分を愛で創造してくださった神様に祈りで肉薄して、揺るぎない信頼をいただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

